
ROAM

笠置 有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROAM

【Nコード】

N9148D

【作者名】

笠置 有

【あらすじ】

異世界系ファンタジー。ゲーム大好き本も大好きむしろ現実と向き合うのが嫌いなヒッキー思考の高校生（女）が若返って、RPG的理想の世界で生活してみる話。

o n e d a y 1

嫌でなかった、といえばそれは確実に嘘だ。

飽き飽きしていたし、いつでも逃げ出したかったし、実際いつでも逃げだすような気概で日常を送っていた。私は現実リアルを感じない。

だからといって現実以外にリアルが無いことだって、知っている。

昔から、人から見下される状況というものが嫌いだった。好きな人もないだろうが、まあ 侮辱されるような言葉には胸がねじ切れる位苛ついた。

それでも事なかれ主義のなかでぬくぬくと育った自分には、残念なことに正面切って挑んでいくような元気のよさ、勢いのよさや良い意味での幼さが欠落していた。だから、いつも思ったことは脳で終わり。口を上って外に出てしまっ、なんてへまはしない。要するに、ただの内気な子供だった。

強くなりたいと思っていた。それは単なる比喻じゃなく、絶対無二のヒーローへの憧れだ。

例えるなら漫画に登場するキャラクターのように ゲームの世界の住人のように未知の力に心底憧れていた。むしろその世界に住んでみたいとさえ思っていたのだから、末期だと思う。

毎日普通に学校へ行って家との往復生活を繰り返す。なんて、くだらない。

幼いクラスメイト達の騒ぎ声も幼稚で悪質な言葉も全部全部無くなればいい。

それでも力が無い。あたしには何の力も無かった。

少年マンガのような格闘スキルなんて一般人が持っているはずがない。そもそもこの現代社会でそれが可能なのか？と思えば自分の思考さえばかしく思える。

かといってそれ以外の頭脳戦略で相手を追い詰めることが出来るほど賢くもなかった。つまり、自分のような「普通」な人間はありふれていたのだ。

見たくないから聞きたくないから 耳を塞ぐ代わりに目を閉じる代わりに頭の中に夢を描いた。俗に言う妄想というやつだけでも。

「やばいな自分・キモイ。」という自覚はもちろんあったのだからそこらへんに突っ込みは不要だ。

そして今・・・

「次の授業は治癒理論か・・・」

「お、まじで？俺は剣術実技。今日からは相手つけてやるらしいな」

嫌味の無い笑顔で隣を歩く少年がいる。年は確か14だといった。

黒地のTシャツの上にグレーのパーカー、足元は動きやすさ重視のスニーカーでジャージのすそを捲り上げている。対するあたしもジーンズにTシャツというラフといえば聞こえはいいが、適当な格好でそろえている。

何の変哲も無い光景だ。いうならば話している内容が幾分ファンタジーだろうか。

「へえ・・・2年でやつと実施訓練か。のんびりしてんねえ」

「あー1、2年は学科重視なところがあるから。俺には関係ないけどな」

「は？」

「2学年程度に一年間費やすつもりは無い。次の中間で上に行くから」

視線の先には、会話の内容さえスルーしてしまえば年相応な笑みを浮かべた少年がいる。

この少年は威張り腐った自信家ではないけれど、たまに覗く意志力、というか自尊心が人より抜きんでいると思う。育ちも在るのだろうか。

けれど、どんなに周囲からヒンシユクを買いそうな言葉を吐いたとしても実際に彼の才能は確かで、だからこそ今ここにいるのだ。

少年の不遜な言葉にどうしてか、笑みが漏れる。意外なことに、この態度を不快に思ったことは一度もない。

「あたしも卒業に7年もかけるつもりないよ。追い抜け追い越せですよ。ただでさえ学院出てからも長いってのにやってられないっての」

少年に負けないぐらいに、聞いた人が腹を立てそうな言葉をひねり出して口にする。

ついでに外人のように両肩を上げ、すんとおろす「ありえないぜ」的な動作もおまけにつけて憎らしさ当社比3倍。

すれ違う学生たちを何の気なしに眼で追いながらも、友人と並んでぶらぶら歩いている今の自分は、どこからどう見てもただの生意気そうなガキに見えるだろう。

共に歩く彼はバイオレットの瞳を細めて笑う。

ここで生きていく術があたしには無い。与えられたこの場所ですぐ生きるか、選ぶのはあたしなのだ。だからこれは幸運である。としよう。

叶うのなら、一度やってみたかった。漫画やゲームのような世界で好き勝手生きる、夢のような現実。画面越しじゃない、文字から想像するだけじゃない。子供じみたリアルが確かにここにある。

低い目線で、足を踏み出して、風を跨いで。今日もここにいる「現実」を確かめる。世界の全てが憎かった日々を踏み消していくように。

今がただ楽しいから。これからも楽しければ、それだけでいい。

だから今は、楽観的な考えを押しつぶすような鈍い痛みがをよぎった事も、気がつかないでいる。

o n e d a y 2

・・・であるからキクスの条約によって約300年の契約が約束され・・・

白板の前を行き来する教師の解説垂れる声が耳に届く。それほど声を張り上げている様子もないのに、声帯にスピーカー内蔵か？というほどの音量で教室中に響きわたっている。もちろんこの世界にマイクなんて素敵アイテムはないし、マジックの類でもない。リアルに種も仕掛けもない魔術、とかいうやつだ。

最近、目立って頭髪が後退してきている教師の後ろ姿を目で追う。カッカツと規則正しい靴音を響かせホワイトボードの前を行き来する姿がまるでペンギンのようだ、といったのは誰だったか・・・それにしてもあんな奇妙な色合いのペンギンがいたら気持ち悪くないか。というか人気でなくね？ と合いの手を入れたのはいつだったろうか。実際の頭の光具合はペンギンのつるつる感に近い・・・のかもしれない。ただの寂しげな頭皮、とも言う。

大学並みの講義時間とメリハリのない授業で大分脳が鈍ってきている。頭髪とか、どうでも良すぎる。

意味の無いことをつらつらと考えながら、くるりとペンを指先で回す。

肩が凝った。授業は後5分ほどだろうか。首に下げた小型時計の針が妙にのんびりと動く。何気なく教室の様子を見渡すと机とすっかり仲良くなっている生徒が4割弱。確かに眠い。

ちょうど前の席に座る灰色の頭が、頬杖ついた手からガクリと落ちる。どうやら少年は、何とか睡魔と闘っているようだ。がんばれー。あたしは昨日8時間睡眠だぜ。いやっほう。

紛いなりにも9年間の義務教育を乗り越えたのだから、興味のない授業というもののつらさは嫌というほどにわかる。まあ、それでも割り切るしかないんだ。それが事実。決して優等生とはいえない学生であった自分だって、嫌々ながらも時々脱走したりしながらも、高校生まで乗り切ったのだから。

ゴーン・・・ゴーン・・・

学院の中央広場に立つ銀色の鐘の音が窓をすり抜けて響いてくる。授業の終了を知らせる鐘。

「えーでは、今日はここまでです。考查範囲は各自で確認しておくように」

くるっとこちらに顔を向けた教師が言い放つと、むくりむくりと生

徒たちが頭を起こし始める。おはようございます。

「では解散してください」

すばやく教室から出て行く教師を眼の端に収めて、教科書やらノートやらをまとめて手に持つ。いすを引いて立ち上がると、斜め前の灰色の少年がぱちぱちと目を瞬かせ、ぼそりと何事かをつぶやいた。あたしの目が確かならそれはこう動いたと思われる。（勝ったわ・俺）

どうやら彼は睡魔さんとの一騎打ちに勝ち抜いたようだった。

大きなガラスで仕切られた窓は透明度高く、それは技術面の発達著しいこの世界ではさして珍しくもない代物だ。何げなくそれに目をやれば、通路脇の芝生に座り込み談笑している幾人かの生徒の姿が見える。

こういう開放的な雰囲気は好ましいものなのだろうけど、人の多い場所というのはどうも落ち着かない。

レンガを敷き詰めた渡り廊下は、中庭から差し込む昼前の日差しに照らされている。全体的に歴史を感じさせる造りの校舎だけれど、どこも手入れが行き届いていて小奇麗な印象だ。

時間割では、次の授業まで1時間ほど間が空く。机に向かう歴史の授業と違い、剣術の方は実技の後片付けだのなんだのがあるだろう

し、何か行動を共にすることの多い彼とは会えないだろう。

どこことなく賑やかな雰囲気の中庭から差し込む光が、ピカピカと校舎内を照らしている。大して眩しくもないはずなのに、教室の明るさに慣れた目にやたらと沁みる気がして、少し歩みを緩めた。

「サリ！」

聞き覚えのある声が後方から上がる。足を止めて振り返れば、童顔に輝く笑顔をのせた男子生徒が後方からかけてくるのが見えた。その助走を殺さないまま距離はゼロとなり、どつさりと背中に重みがかかる。

「おもっ・・・ちよつとニチラ・・・っ重い」

「久しぶり！会いたかった！キリはまだ授業？だよねだね、剣術専攻してたら時間かかるもんねー」

今走ってきたとは思えないほどの流暢さで話し始める彼とも、何かと接点が多い。

ただ難点を挙げるとすれば、このスキンシップ過剰ぶり。日本とはまた違った容姿が集まる世界ではあるが文化はそれほど大差ないは

ずなのに、こんなところだけアメリカナイズでいいのか。

「おーもーいー」

ぶんぶん横揺れして振り落とそうとしてもしっかり首に巻きついたり腕はア。ンアルファですか？並みに離れない。その上なにやらキヤハハ、と楽しそうな声まで聞こえてくる始末。

いつものことながら何歳児なんだ。こいつの扱いに長けているのは穏やかさが売りの彼なのだが、この場にいないのが悔やまれる。

ずると身長2cm差の少年を引きずって歩くさまはじゃれている様にも見えるだろうが。

「重い重い重い首もげるんですけど」

「それはそれで見てみたい気がする」

「いやもげませんけど」

おもしろそう、的なニュアンスの言葉とともに首にかかる腕に力が入ったので、きつとそんなかわいものじゃないのだろう。

ぶら下がり運動に飽きたらしいニチラは、小柄な見た目の割りに速い速度であたしの歩みについてくる。

教室の並ぶ棟と棟をつなぐこの廊下は人の往来が激しいせいか、とくに昼前のこの時間はにぎやかだ。悪く言うならば騒々しい。けれども、暖かい日差しを適度に取り込む風通しのよい通路は井戸端会議であろうが次の授業についての相談であろうが時間をつぶすには

最適で、居心地がいい。

心地よい日差しにぼんやりと緩んだ頭に、ニチラの不機嫌な声が入り込んでくる。

「・・・サリー・・・聞いてないでしょ」

「そんなどっかの魔法少女みたいな呼び方やめて・・・わ、なに？」

そうだ。隣には今話し相手がいるのだ。処構わずペースを崩さない性分はよく人に指摘される欠点である。魔法少女？と首をかしげながら疑問詞を浮かべているニチラに気がつく。

へらりと緩んだ笑みを浮かべると、対するニチラは軽く目を細めて口をはの字にした4歳児のような表情。まじかわいい系だなこいつ。複雑な思いがよぎる。そして軽くへこむのはなぜだ。

「今度の審査会でキリも狙ってるんだろうねえって言ったの」
こちらの思いなど気にかけない様子で続けられる言葉にうなずきを返す。彼を指す固有名詞だけはすんなりと頭の中に入ってくるあたり、自分は相当惚れ込んでいるんだなあとしみじみしてしまう。

「向上心の塊だからねえ。しかも本当にたいていのことはやり遂げるから、ほんと尊敬する」

いつも突き詰めて自分のことを考える癖のある彼だ。たいていのことは軽くこなしてしまうのに、上を見ることをやめようとしめない。穏やかで、まっすぐ。しなやかに伸びるその背に並べるのなら、大

抵のことは犠牲にしてもいいや、と思っちゃった。

「えーサリが言うとうそ臭い」

何がうそ臭いんだ、と胡散な目線とともにぶすつとしてやるとはあーと大きな息を吐き出してぶつぶつと言葉が返ってくる。

「だって、キリとサリはどう考えても立場に上下関係含んでないもん。キリだってなんかサリといるときは笑顔多いし。第一、出世コース？ってゆーか異例の才能で驀進コースまっしぐらのくせにいー尊敬もくそもあるのー？」

いやこいつくそって言ったよ。この外見で口が悪いとかある意味フアンタジーだ。不条理だ。

「・・・ニチラといるときだって笑顔でしょ。ってか第一印象で損するタイプだからね。あれ。」

「尊敬してるよ。それしかいい言葉が見つからないぐらいにはね」彼の隣を歩くのは自分だけがいいと思う。あの背を追えるのならどんな下落コースだろうが才能コースだろうが必要なら仕方がないものだから。

緩んでいるであろう頬を笑みで引き上げれば、ニチラはさもありなん、はいはいわかったよおなかいっぱいのうんざり顔で溜息を吐

いて見せる。

「なあんか、親友っていうのもちよつと違うよねー・・・キリのことになると軽く危ないもんねーサリは」

若干気持ちわる・・・いやいやなんでもないけどね。とかいつてにつこり笑うこいつはほんといい性格してると思う。

「でも多分、サリジエだからキリに並んでもおかしくないんだろうね。男とか女とか関係ない感じで。熱いよねー青春だよー夕日を背に走ってほしいよねーあははは！」

なにがツボにはまったのか、腹を抱えて大笑いしたかと思えば、いきなりガバリと首周りに飛びついてきた。いいなあ。おもしろいなあ。とか呟きつつも発作はおさまる様子がない。しかも笑い上戸かよ勘弁してください。

道行く生徒たちの、なんだあいつらといった目が痛い。いや、この笑い上戸の人がね。ツボが分からないんだけどね・・・という心の声は届かない。

「でもあつちも相当惚れ込んでるしねーお似合い！変わり者同士だー・・・あはは！でも僕にも構ってねーひまひま」

「はいはい」

「あと、たまには僕のことも見に来てくれないと拗ねるから、よろしくね」

「・・・はいはい」

拗ねるから、なんて小さい子みたいな言葉をじつと眼を見て言うの

はやめてほしい。心臓に悪いのだ。

こういう確信犯的な行動を、最近になって時々見せるようになった。嘘か、本当かの線引きが曖昧なのだ。こいつは。

やたら至近距離で居心地が悪くなってきたところで、一瞬ぐいと体を強く引かれ、耳元に彼の顔が寄る。

ほんの一瞬だけ耳元に漂った言葉の切れ端を拾う間もなく距離は離れて、熱が遠いた。

「じゃあ僕、次の授業術式過程だからこつち！放課後にねー」

ぶんぶんと大きく手を振りながら走っていく様子に、詰めていた息を吐いて手を振り返す。

廊下の角を曲がって見えなくなった影から、目を逸らしてふと呟く。

「嘘でもいい」

唇が渴く。短い言葉の意味は、正しい意味は何だろう。

てかてかと光る太陽が小さく佇む影を少しだけ色濃くして、雲に隠

れて
いつ
た。

o n e d a y 2 (後書き)

全話見直し・書き直し中
終了見込みは現在ありません。

o n e d a y 3

てをあきらめてしまえば

すべ

自分には無理なんだ。どれも仕方のないことなんだって、そう言っ
て逃げることもしも許されたとしたら。想定される「あつたであ
ろう未来の自分」はどんなことを考えて感じて生きていたのだろう

そんなくだらないことを、今を捨てることが出来なかった自分はず
っと、馬鹿みたいに考えている。

膨大な数の教室が立ち並ぶ我が学び舎は、一体実用性はこうしたというぐらいに外観重視の建造物だ。

良くも悪くもファンタジックな外観なのだが、広大な敷地にぼかんと建てちゃった感が否めないとは私の勝手な感想だ。

各学年の教室が並ぶ「北」、あたしが今居る所が講義室の並ぶ「東」先生方の控室や教会、購買、食堂などの施設が揃った「西」棟をすべて合わせてリデン国立学院となる。

1階の教室棟は一般教養。2階は実技全般。3階には魔術系の講義室があり、4階・5階が資料室や休憩スペース。その一つ一つが広いつたらない。3つの校舎を渡り廊下で繋いで行き来できる造りとなっているだが、時間割によっちゃ一日の歩行距離が1万歩、なんて軽い。

まるでRPGの雰囲気プンプンなこの世界には、義務教育というものが存在しない。

国立学院の建つ首都では、ある程度の年齢からの学習は推奨されているとはいえ、小学生と言って差し障りのない年齢であっても、読み書きがいまい、なんてざら。それでも現状を危惧する方針があるあたり、現在発展途上の国ではあるのだ。

そしてこの話の出発点である国立学院とはどういった施設なのか？これは非常に特殊な位置付けがされているのだ。

「武術全般、特殊技能取得」という目的が大前提となるため、入学

者は国内外から試験を経て選定される。現代で言つと公務員といった感じだろうか。この資格があればとりあえず食いつぶされることはないぞつてやつだ。

資格というのはなんとも魅力的な響きだ。安定した生活という目標に向かつて、あるいは夢を抱いて生徒たちは熱心に学ぶ。そして優秀な人材育成のために、講師陣は豪華で施設も充実。環境としては申し分ないこの場所で、自分もまた熱心に学ぶ一生徒として存在している。

初めて「火」を見た人間はさぞ驚いただろう。はじめて太陽を「光」として意味付けた人は偉大だ。
それがどんな意味を持つか、どのような用途で使用されるのか、予測が及ぶものではなかつたろうけれど。

魔術。魔法。そんなものが使えたらどれだけ楽しいだろうと、そう思っていた。

手から火が出る？空から思い通りに雷を落とせる？なんてミラクル。素敵すぎる。かつこいい。ファンタジーすぎてリアルにたぎるんですけど？なんて。

けれども現実には、そんなに甘くはない。それが世の常なのだ。

眼前まで迫った光が明確な意思とともに破裂した。黄色く光るそれが鋭い弧を描いて四方に飛散するのをとらえて後ろへと跳躍する。

青と黄色。信号ならば行けと止まれ。けどもこれは「危険、逃げろ」の合図だ。耳元で風がびゅうびゅうと鳴る。大丈夫だ。加護が、私には付いている。

「ジ・ファルト」

小さく呟きを乗せて両手を前に差し出す。空気が膨らむ。風が速度を増す。体の前に薄く幕を敷く、風の壁。

どん、と鈍い音と地を揺らす衝撃に足元が揺らぐ。あと3歩分程、前に居たならばばらの地面と一緒に自分もバラバラになっていただろうなあと眼前の景色に思わず苦い笑みが漏れる。

「勘弁してよ、オーファス。あれまともに当たったら享年12歳なんだけど」

嫌味と嘆願を半々にない混ぜた言葉をぶつけたところで彼の表情はピクリとも動かない。

光の発射元におわすのは見知った友人であるかの人。計算された美貌。いつもは涼しく笑んでいるそれが冷たく無機質に佇んでいる。

「大丈夫だよ。その時は一瞬だ。」

「殺る気まんまんじゃないですか・・・」

・・・何が大丈夫なのか理解できない。したくない。ゆるゆると首をふってとりあえずスル！。

いつものことながら、がちで怖い。もう早く終わらせて、いつもの優雅な彼とお茶でもしよう。

伶俐な美貌からにじみ出るのは赤の脈。ということは、次は「火」かな。

対面する彼が差し出す腕に色が宿る。私にしか見えない、魔力のかけらだ。一気に量を増すそれが完成する前に、決着をつけようか。

「ウォリアータ。清廉な泉から出る恵みをこの手に！」

「ファイア。激しく踊り狂いその力見せつけよ！」

さあ、攻と守どちらが勝つか、後は単純な力比べだ。

香ばしく漂うコーヒーの香りにまったりとするひと時。これがなんと
とも言えないのですよ。と爺くさいことを思いながら、目の前に坐
す友人へと目を向ける。

彼の手にはティーカップが収まり、黄金色の紅茶が揺らめいている。
これこれ。これが昼下がりの一時としての、正しい姿だ。

「まったく、参るね。押してこないものだから、こちらから攻める
しか手がない」

揺れる水面に向けてぽつりと呟く彼を視界に入れてから、こちらの

手中に収まったティーカップに視線を移す。沼のように黒々とした液面がゆらゆら揺らいでいる。やっぱりコーヒーは偉大だな。午後の休憩には欠かせない名脇役だ。

「攻める間もないぐらいの連続攻撃だった気がするけど」

「でも君なら攻めに転じることも出来たはずだ」

「それは、買いかぶりだよ」

鬼神のごとく高度な術式をぶっ放してきた先ほどまでの「彼」はどこへ姿をくらましたのか、というほどに穏やかな風貌だが、これが全くの同一人物なのだから二面性、いや多面性に富んでいらつしやる。

「ほんとに同一人物なのか・・・。（毎度のことでも感情高ぶってとかってレベルじゃなくね）」

「ふふふ・・・」

「・・・（怖いし）」

眼前の麗人は微笑む。それがいつもの姿であって、穏やかな彼の本質だと多くの皆様は思われているだろうが、実際に面と向かって対戦する身にもなってほしい。

使う術式はどれもこれも超攻撃型だし、どれもこれも殺る気まんまんなのだ。ああ良く生還したな自分・・・。

「ギャップ萌えて言うしね・・・。多少は許容範囲なのか・・・。（

と思うことにしよう)」

「?」

「あーまあ……。オーファは次の授業なに?」

「ああ……。しばらく時間は空くけど、ウルジ教授の講義を聞いてみようかと思っている」

「あー王立研究部の学者さんか。そういえば臨時講師で入ってたっけ……。魔獣の生態系について?」

「ああ。なかなかない機会だしね。サリジエもどうだい?」

「遠慮しとく。今日は割とかつ詰めて授業は入れてあるし。誰かほかの人でも誘ったら?」

「不要だよ。他なんていない。……。君とられないのは残念だ」

「……………」

いい言葉が浮かばなくて、ただ素っ気なく またの機会にね、と言葉を切ってカップの中身を飲み干した。そろそろ次の授業が迫っている。

いかんせん、これは悪い癖だ。彼の、本当に悪い癖なのだ。

「ねえオーファ」

透き通ったブルーの瞳がこちらを向き、なんだい？と問うように首を傾げられる。穏やかな雰囲気綺麗な容姿。彼に近づく人は多いけれど彼はいつも一人だ。独りでこうしてお茶をしていたり、ふらりとどこかへ消えてしまう。

誰か気が付いているのだろうか。

いくら同じ時を過ごしても感情を宿さない瞳があること。授業には不要な程の高度な術を毎回故意に、まるで見せつけるように使っていることを。人見知り、なんて次元ではなく、人を拒むことを誰か知っている？

「君は強いね」

笑みを向ける。どうか、言葉を拒まないで欲しいと。

「私も強い。でしょ？」

「ああ。だからサリジェは好きだよ」

どうも、ここへ来てからおせっかいな気質になったような気がする。この頑ななガキンちょを、どうにかして本気で笑わせたいとか、思

ってしまうのだ。

「ありがとう。でも嬉しくない。強いからって、好かれても全然全く嬉しくない」

満面の笑みで言ってる。徐々にオフィスの鉄壁の笑みが崩れていくが、気になんてしてやらない。

「わたしも君のことが好きだな。でもそれは強いからじゃない。一緒にいたいと思うよ。周りに他の人がどれだけでも君やキリや、ニチラやヴィーがいれば一番にそこに走っていくと思う。」

「・・・なにを・・・」

「強くなかったら価値がないかな。じゃあ強さにどれだけの価値があるんだろ」

「・・・弱さは罪だ。自分の身を守れもしないのに、悠々と生きているなんて愚かだ」

「あたしは」

まったく、どこをどうやったらこんな偏った考え方しかできなくなるんだろう。

「あたしは、強いか弱いかなんてどうでもいいこと気にして、一緒に居たい人を選べない。好きだから、楽しいから、一緒に居たいと思う。ねえそれっておかしい？」

「……きみは、強いから。選ぶ権利があるんだ。弱者は他人に縋って生きるしかない、惨めな存在だからね」

どうして、そんな悲しいことを平気な顔して言うんだ。ゆるく引き上げた口角はそのまま、目じりも緩んではいるけれど、それって笑顔って言える？

まるで自分自身に言い聞かせているみたいに、その言葉はあたしをすり抜けていく。

それが嫌だった。だからあたしは手を伸ばす。その視線を言葉を受け止めないと、きっと彼は私の価値なんて認めてくれないだろう。

「うつ！？」

「あたしは強い？そりゃそうでしょ。そうなれるように努力してんの。大事な人と一緒に居て、その人を傷つけるのも悲しませるのも嫌だから、懲り懲りだから、必死なの！」

わしり、とオーファスの頬を掴んで無理やり視線を固定してやる。こんなこと、されたことないだろ。驚きに見開かれた眼には、不機嫌な顔をしたあたしが映っている。ひよつとこみにたいに崩れればいいのに、それでも美貌が崩れないなんて非現実的すぎる。

「弱いから一緒にいちゃいけない？馬鹿か。一緒に居ることに必要な権利なんて、必要ない」

沈黙。少しだけ、困ったように彼の眉間にしわが寄る。

「あたしは、強いから君と一緒に居たいんじゃない。オーファスだから一緒に居たいと思うんだよ」

ああ我ながらクサイこと言っている。とりあえず彼の顔から手を離してあげた。

ごめん。ちょっと赤くなっちゃった。

ゴーン……………ゴーン……………

始業5分前の鐘だ。

「じゃ、またね」

どう收拾付けるかなんて考えてなかった。

こちらを茫然、といった感じで見つめている彼には申し訳ないが、遅刻はいただけない。

コーヒー代のコインを置いて席を立ち、彼に背を向ける。

「サリジエ」

「ん？」

「・・・・・・・・また」

「・・・・・・・・」

「また・・・・・・・・はある？」

振り返って見ても、座ったまま顔を俯けた彼の表情は読めない。
またがあるか？次も会えるか？って意味だろうか。それならば。

「うん。またね」

若干浮ついた声になった気がする。

それだけ言っで、もう一度彼に背を向けて、廊下に見えた次の授業
の教師の背を追うように、あたしは走り出した。

o
n
e
d
a
y
3
(後書き)

o n e
d a y
4

なくて

るから

せる。

揺るがないのだと

るのか？

自分より優れた人間という存在を認めたく

認めてしまえば自分がとても惨めな気がす

それが何より恐ろしくて

自分の平凡さには気が付いていたけれど

それを許すことはこの生すら無意味に思わ

そんな物見たくない 知りたくない

それでも存在を認めてくれるのか。自分は

存在に意味があるのだと、言葉にしてくれ

5階ラウンジスペースから見える通路を、颯爽と歩く後ろ姿。金髪で長髪なんて、グラマラスな外人美女にしか不可能なスタイルだと思つてたのにその夢をぶち壊してくれた。高らかに靴音を響かせ、年齢不詳男が猛スピードで歩き去っていく。

（やばい。やばすぎる。あの人の授業で遅刻とか・・・・・・・・）

授業自体は単位制なので必要時数のみ出席すればいいのだが、自分の場合はそうは言つてられない。優秀でいることが、就職への最短コース。目指せ飛び級。目指せ学年主席。つてなわけで……

（ああもう息切れる！動悸する！こんだけ走ってなのに、間に合わないって・・・！）

遅刻は全力で回避したい。けれど最短距離で、最速で次の授業へと向かったとしても多分、間に合わないだろう。体力には自信があるが、このまま必死に走ったところで結果は同じ。授業以外で「これ」を使うのは5学年以上、つまり2学年に所属している自分には禁止されているのだけれど、仕方がない。

自己責任、という言葉が一瞬頭をよぎったが、それは置いて。

「今は、目先の危機回避っ・・・！」

教室棟を繋ぐ渡り廊下を走り抜けて、その勢いのまま、いい具合に開きっぱなしの窓に向かって速度を上げる。

宿れ。この足に空を駆ける力を。踏み出した右足に思い切り体重をかける。次の一步でなるべく、高く跳べるように。

(・・・きたきた！)

下から風が吹いている。窓の棧に駆け上り、いつせーの！でそのまま宙へ。ここ5階？大丈夫、大丈夫。だってフアンタジーだもん。

地面に付くまでは2秒弱。両腕を引っ張られるような感覚に次いで、小さな衝撃で地面に足が着く。パタパタと足踏みをして床の感触を確かめた。まだ、足元から風が吹きつけている。地面は約1m幅。高さにして約5m弱。ぐらぐらと不安定な足元に肝が冷える。高い。やばい。

降り立った地面のそばにはいくつものガラス窓が並んでいる。その一つに見知った顔が映った。ぐらつく足元をバランス感覚で支えて、ガラス窓を叩く。

コンコン。

ガラス窓の向こうに見える顔が、音に反応して窓に向く。瞬間表情が固まったのは、まあそうなるだろうね普通。

「開ーけーてー」と口パクして、ガラス向こうの彼に向けて熱視線を送る。若干瞳に切なさなんてものを宿らせて見たけれど、口元は弄りがいのある彼の反応に期待してしまつて緩む。おおいかんいかん。教室の外窓をノックノック。これで体が透けてたりしたらガチだけど、あいにく生身ですよ。

あんぐり、といった様子で動きを止めた彼は、ほんの数秒で状況を判断したらしくその駿足で窓際に走り寄り、勢いよく窓を空けてくれる。

「ばっ・・・！馬鹿かお前っ！ここ2階だぞ！？どっから湧いたんだよ！」

「いやいや湧くだなんて、そんな。温泉じゃあるまいし。人間だも

の無理でしょ」

ははは。おもしろいこというねえ源泉ですか（笑）なんて適当なことを言いながら棧をまたぐ。驚愕の表情を張り付けて失礼にもこちらを指さす少年を押しつけてよっこいしょ、と室内に足を踏み入れた。途端、講義室に揃っていたまじめな生徒諸君からの視線がぐさぐさ刺さってきた。痛い。

講義室の黒板上に取り付けられた時計は授業開始の7分前を指している。よし。せーふ。

今しがた入ってきた窓からひよい、と顔を覗かせる。ぐいと首を伸ばせば見える、不自然に外側へと大きく開かれた窓から、中庭を跨いだ反対側がこの講義室になる。改めて確認してから、思わず苦笑いしちゃうぐらいに無茶なことをしたなという自覚がムクムク湧いてきた。

「いや……一歩間違えばやばいね。天に召されてたかも」

ぼそりと呟けば、隣に来ていた少年も同じように私の視線の方向を見つめて、次いで私に視線を移して、思い切り溜息をついた。

「前々から思ってたけど、お前って人間じゃないよな。」

返す言葉が思いつかなかったので無愛想なその言葉にとりあえず視線だけを返すと、飴色の瞳をふいと背けられてしまった。なんだう。このツンデレ。

「グイー座ろう」

「・・・・・・・・」

「先生来ちゃうよー」

「・・・・・・・・・・はぁ」

（また溜息つかれちゃったよ）

先導して後ろの空いた席に座って隣をポンポン叩くと、彼はうつとおしそくにそれを見てから通路をはさんで反対の席に座ろうとする。あえての無視ですか。そうですか。ならばと席を立ち、ぶすつと頬杖ついてそっぽ向く彼の隣へと席を移動する。どすん、と勢い付けて席に着き、来てやったわ！的なアピールも忘れない。真横に来た

気配に気がつかないはずだろうに、少し身じろぎしただけでこちらを見ようともしない。まったく、本当に意地っ張りなガキんちよだ。これ同年代の女の子だったら萎縮しちゃうよな。でもあいにく精神年齢。。歳の私は怯まない。

グイと彼の服の袖を引っ張ると、彼は不機嫌そうに仕方なさそうに頬杖をやめて半目を向けてきた。

「ありがとう。ヴィー心配してくれたんだよね」

「・・・・・・・・別に」

「ん。でもヴィーがいてくれて良かった。じゃなかったら教室の中入れなかったかもしれない」

「他の奴が開けるよ。窓ぐらい・・・」

「かもね。でも開けてくれないかもしれないし。あたしはヴィーが

窓開けてくれたことが嬉しいし、そうやって心配してくれることが
すっごい嬉しい。」

「・・・いちいち大げさなんだよ。サリジェは」

そう？って言うて首を傾げれば、クシャリと無表情を崩して彼が笑
った。

その表情は年相応に可愛らしくて、いつもそうやって笑っていれば
いいのに。と思う。

．．．
．．．
．．．

幾分ギスギスした雰囲気も緩和したところで講義室前の扉が開く。
扉に恨みでもあるのかというぐらいに盛大に開かれたその開閉音で
耳がキンキンするんですけども。

扉が小さく見えるほどの長身に、鮮やかなブロンドヘアを靡かせた伶俐な美貌のひと。凍てつく波動・・・じゃなかった眼差しが教室内を一瞬舐めるように見渡した。

「どうやら揃っているようだ。無駄がなくて何より。・・・まあ」

教壇まで素早く移動したその人がふつと言葉を切って視線を一点に向ける。

「どのような方法でも移動。歩行も、走行も、飛行なんていうのも」

その冷たい絶対零度な視線がどこに向いているか？それは誰より何より世界中の宇宙上の何者よりも私がわかつてる。

弧を描くように下げられた目尻。口元はつり上がって言葉を紡ぐ。

「そうは思わないかい？サリジェ・デイドール」

全くその通りですね。先生。だからその妖怪大戦争みたいなお顔は止めて欲しいんだ。

o n e d a y 5 (前書き)

現在4話まで修正済み。
5話本文は未修正です。

o n e d a y 5

なんだよなんだよもうっというかむしろひと思いに怒るとか寝めるとかしてくれた方が楽なんだけど。

独白。独白。混迷を極めた脳内でぶちぶちと言ひ募つてみたところで、人の悪い（人相の悪いってこと）顔をした教師は、滅多に見せない表情筋の動きを緩やかに消してまるで今の今まで何事もありませんでしたよ、といった風に授業を始められた。まさかの規則違反も含めてオールスルー。冷ややかなその横顔に興味ないことどうでもいい、とでかでかと書かれているのがあたしには見える。見えるよ・・・。

さてさてそれでは基本的なおさらいだ。魔法とか魔術。このこっぴさずかしいぐらいにファンタジーな単語は一般的なこの世界。

ゲームとか漫画とかでありがちな「呪文」に当たるのが「詠唱」。もちろん文字で書いて発動させる魔術だってある。無詠唱とかも、あり。だけれど言葉も文字も媒介としない魔術って言うのはどうも一般的ではないらしく、上位の魔術師が使う高度なテクニックなのだという話。

「詠唱」という響きが特にかっこいい感じの術式は、どうにも内容

自体が曖昧でわかりにくい。っていうか現代ではありえないんだからもう理解の範疇にないっていうのが本音だ。

例えるなら化学式のようなもので、展開式、というもので一から土台を積み上げて現象として発現させる「魔術」は筋道立てて考えることが必要であって、ぼやかした表現を用いた授業なんてされても分からんぷりな話なんだ。その点ではこの先生は優秀だと思う。理に適った授業内容は実戦向きで、無駄がない。

「炎系統の術式は慣れるまであまり短くしすぎないほうがいい。繊細なイメージを描けないと諸刃の刃にもなりうる。上級者となれば一言で、あるいは無詠唱での発動も可能だが、術を使う程の状況に身を置いているというのに愚鈍な頭がいつも以上に回るはずもないまず、無理だと思っておくこと。そんな無意味な浪費をするくらいなら、頭で考えなくとも口が覚えるほどに練習することだね。それにはまず術式の中に魔力を練った言葉を・・・」

ほーう。へー。と教卓の前の麗人の言葉を飲み込むように聴く。途中やたらと見下した発言が混ざっているが、もうここらへんは隠しきれない性格の悪さがにじみ出ているとも思っておけばいいだろう。ふんふん、とノートにメモ程度に書き込んでおく。

一度も噛むことなくすらすらと授業を進める先生は、例えばこう、片手を前に突き出して見せる。

「光神の円舞 暗きを照らし一時の恵みを。 炎神の娘テウヌスよ
光を高め 回廊を廻れ」

冷やかな声のあと、ふわり、と空気が揺れるのが見えた。金色の線と深紅の線が交わり、先生の腕の周りをぐるりと囲んで宙に浮かび上がった と思った瞬間。

鈍い着火音と静電気の弾けるような音。 宙に金と紅の花が咲いた。

一瞬で開花した華は姿を消して、それに見とれた生徒たちのわあだの綺麗だのといった感嘆の声が響く。

さすがカズイラム様・・・！みたいな悦に浸った声もちらほら聞こえた気がするけど多分幻聴。

ほら、その女子。両手組んで祈るのは創世の絶対神様だけだとかこの前言ってたでしょ。なにぎらぎらした目してんの怖い。

遠巻きに周囲の騒ぎを眺めているといかにも不満げなトーンで「光と炎の簡易詠唱だろ。あんなので騒ぐなよ」とか呟きが聞こえる。おうおう何ですか。と横を見れば、彼はペンを机に放り出してグデ

りと卓上に伸びていた。

「ヴァンジェリン」

「何」

「必須単位。必修単位。年間36単位中18単位が魔術基礎分野。武術はその半分。あれ君って召喚とか治療理論とかそっち系でしたっけ。違うつしょ。それともなに一緒に今度ジグド探け」

「わかった」

「え、ジグド探検に行」

「そっちじゃない！・・・分かってるよ。俺にはそんな適正ないってことぐらい。」

おおそっちか。なんでわざわざ自分を蔑む方に思考を持って行くんだ。思春期？

ジグドなんて気狂いの召喚士しか行かないようなダンジョンをわざわざ話のネタに持ち出す自分も大概性格が悪いけども。

どんよりと暗雲を背負ってしまった彼を見つめていると、なんだよと剣呑な声と視線を返してくる。

「……いや思春期だったなって」

「はあ？」

ポロリと漏れた失言を誤魔化すみたいに曖昧に笑ってからそうじゃなくて、と正確で分かりやすい言葉を選ぶ。

「魔術の才能がどうかじゃなくて。ほら、授業態度というか。実力云々よりもそっちの方が評価点高いでしょ。協調性とかそっちの方。ヴィーがネガティブなのはもう、こう、どうしようもないけど態度ぐらいはまじめっぽく繕ってこうぜって話。」

ヴァンジェリンはプライドが高くて、エリート意識が人一倍なのだ。「できない」なんて言われたことがないのだろうなあってこの子を見てるとなんでか胸の裏側がもやもやして仕方ない。その度にあたしがからかうもんだから、どうも苦手意識を持たれている気がする。

「知ってる。自分の才能のなさぐらいわかる。……だからこんな授業受けることに意味ない」

「できないから、いらないんじゃないよ。必要かそうじゃないか。自分の感情じゃなくて、ここにある事実の方が大事でしょ？」

ぼそりと低く機嫌悪げに言いきった言葉に、それ以上切って捨てるような言葉で返す。

そんなあたしの顔を見て眉間にしわを寄せ、何やら考えている様子だったけれど、それは一時で不思議そうな表情にとって代わった。

「サリジエの言うことは時々、よくわからない」

うん。多分、今の君に分かる必要は、ないのだと思う。

ああでも大人げなかったねごめん。と授業後に冷静になってみれば後味が悪いばかりだった。

そもそもただ偉いの自分……格言じゃあるまいし。

会話一つ交わさずに歩くなんでどんなシュチュエーション。そつと顔をうかがえばこれまたポーカーフェイスで何を考えてるのかはつきりしない。ぎゅつと寄った眉根からは、何か考えてるんだろぅなあということしかわからない。もうほんとごめん。自己嫌悪。ごめんね……。

暗雲背負って頂垂れていると声変わりを済ませたばかりのかすれた高音が不思議そうな色を落とす。

「なに言ってるの」

え、立ち止まって横を見れば不思議そうにいや、訝しげにこちらを見る少年。

訳が分からない。なに、って見返せば 意味がわからないとも言いたげに謝ってるけど何に？と言われる。

出てましたか。声に。

o n e d a y 6

鐘の音を最後に、授業終了。

50分の授業の間にやたらとやつれたヴィーと歩く。中央講義室の立ち並ぶ棟は、楕円型のエントランスを中心に上下左右の長い通路に分岐して教室が立ち並んでいる。西側の第一講義室から出て寮への帰路をたどる。白で統一された館内は清潔感だけでなく、どこか神聖さを漂わせている。

「・・・・・・・・生きてる？」

「・・・・・・・・ぎりぎり」

「そつか・・・生還できたか」

憔悴した様子に思わずもれる苦笑を隠せない。

のんびりとした歩みで中央階段までの道のりを歩く。授業が終わったばかりなので周囲には同じように階段に向かって歩く生徒や次の授業までの時間をつぶしている生徒が行き交っており、それなりにぎやかだ。

「ヴィーはまだ授業あんの？」

「次、槍術実技」

ちらり、と一瞬こちらを見てすぐに視線を前に戻されてしまう。

いつもの愛想にかける調子に戻っているようだ。どうにもとっつきにくい印象を与えるこの態度を改めるつもりがあるのか無いのか・・もしかしたら自覚していないのかもしれない。

「え！・・・槍、使えるの」

「いや、使えないとだめだろ」

へえーそうなんだ。と返してでも普段使ってるの見たことないしと言え、剣術が一般的だからと帰ってきた。

「お前は授業とってないの」

「うん。一応応用武術系の実技はとってるけど、今日はこれで最後」

「ふーん・・」

なにやら含みのありそうな視線を感じるのだが・・

「何か言いたいことがあるなら どうぞ」

「お前そんなの必要あんの？」

「さあ。どの程度のレベルか知らないし」

「はあ？騎士団レベルだったのに2学年の生徒相手ですこずるわけねえじゃん」

あきれたように目を細めてため息をつかれてしまった。本当に生意気だ。話し方から態度から全てが。

「それは君だってそうでしょ。」

あたしがそうだというのなら彼だって同じぐらいに言えることなのだ。

「俺、お前にぼろ負けしたんだけど」

いやなことを思い出した、というように顔を歪めている。

「・・・経験値の差だって。あたしは剣技メインじゃないし。比較対象ならオーファあたりでしょ」

「・・・オーファス・・・もそうだろうけど、サリジェとキルルージュに一番圧倒的にやられたからそれがむかつく」

いや、むかつくとか言われても。こればかりはどうしようもない。まっすぐな気性の彼はオブラートに包んだ物言いというものを身に付けていないらしい。

遠慮の無い言葉をあたしは好ましいと思えるのだが、多くの人はそうは思わないだろう。実際ヴィーを倦厭してどこか距離を置く人はなかなか多い。人間、長所が必ずしも人に好まれる類のものであると限らないのは常であるが、まだ15の彼が人との距離を置きすぎるのはあまりよろしくないのではないか。

・・・あたしは母親か？と思わないでもない。

「うんうん キリはすごいよねえー。あんな長剣自在に操ってるし。魔術も簡単なものなら余裕で使うし、ってかあの粘り強さにびっくりだけど」

「・・・お前、自分から話し逸らそうとしてね？」

しゅば、と片手を拳手してカクカクと動かす。透明腹話術。

「そんなことナイヨー」

「不自然。片言。誤魔化しきれてない」

・・ばれた。適当な言動でごまかされてくれるほど融通の利く性格でない事はわかってるが。うつすらと微笑んでみる。不機嫌な顔を返される。

なんか、彼にはいつもこんな顔をさせてばかりだなあ。

だって、嫌なんだ。苦手なんだ。話題の中心にされるのは。裏方スキーだから。ポジション照明係もしくは音響あたりで勘弁してほしい。

そろそろ中央階段がみえるかな　というところで隣の彼が急に立ち止まる。

なにかあったかと、合わせるように自分も歩みを止める。

「まあ、とりあえず勝つから」

「・・・？」

廊下の中ほどで、いきなりこちらを向いて宣言しだした。つり目気味の目と相まって睨まれているようにも見える。

それほど身長差は無いので、強い視線を真正面から受ける形になる。おお。びつくりするわ。

「オーファスにも、キリルージュにも」

くい、とあげた顎であたしの方を指し示す。

「もちろん、サリジエにも」

ふつと口角をあげてどこか挑発的な笑みを形作る顔を、見つめ返してニコリと笑う。

「おう。楽しみにしてる」

漢気のある言葉を返して、おかしくなって2人同時に少し笑った。

o n e d a y 8 (前書き)

小説全文修正中です。
8話本文は未修正。

o n e d a y 8

これは必要なモノだからとっておこう。

これは大切なモノだから失くさないようにしよう。

その差異が わからなかった。

いつか本当に大切なものを手に入れることができたら、そのときに
知ることができるのだろうか？

中央階段から分かれる北側の闘技場へ、次の授業のために向かうヴ
イーと別れてから一人ではーっと階段を上る。
のたのたという足音を思わせる足取りは重い。

首から下げたネックレス型の時計は真昼をわずかに過ぎた時刻をさ
している。丸く透明なガラス球の中に濃い青色の文字盤が入ってい
る時計だ。

デザインが気に入って、長い間身に着けているが壊れる心配はいま
だ、無い。

ちようど昼食にもってこいの時間帯だがあまり空腹は感じていない。
そもそも決まった時刻に3食摂るという習慣が身に付いていないの
だから仕方ないことなんだ、と自分をごまかす。

特にすることも無いが、町に下りる気にもなれない。今日はこのま
ま部屋で過ごすそうと、寮へと向かっているところだ。

全寮制であるこの学院は1・2学年は4人部屋、3学年からは2人

部屋、5学年まで来てやつと1人部屋を得られるのだがそれには訳がある。2学年までは良いとしよう。3学年もまあいい。しかし4年次になると学年の生徒数は一気に半数近くまで減る。なので3学年でも実質一人部屋を手に入れられる生徒も出てくるのだ。

理由はこの学校のカリキュラムにあるのだが・・・今は特に考える必要も無いことなので実際にそのときが来たら改めて考えることにする。

という前置きの後になんだが、あたしは1人部屋を使わせてもらっている。2学年なのに、と不平を漏らす人もいるがそれはごく少数だ。

この学園に入学する、ということ自体があたしの辿った経路では前例が無く異例なものであると同時にその異例さゆえに大目に見てもらっている

というわけなのだ。これもひとつの条件として国家権力者に提示してあり、その人本人が領いたのだから問題はない。

文句あるならばかかってこいコノヤロー、という姿勢で 日々の平和な生活に勤しんでいる。

なんでもない時間。特別何があるわけでもないのに、なんとなくむなしさが募って暇でやる事が無くて寂しくてどうしようもなくなる。

昔からの癖だ。ふとした瞬間に考えに沈みこむ、悪い癖。

モラトリアムのようなものだろうか。

学生という立場に置かれている自分。子供にだけ与えられる猶予期間。

迷うことが許される 無知で愚かであつても咎められはしない。

子供であるがゆえに守られるだけの弱者でいることが許されるのだ。しかし、限られた一時が過ぎてしまえば、急に世界に放り出されてしまう。

自分で生きていけ、責任は自分で背負えと大人は言い、誰もが今までの甘い顔など無かつたかのように突き放す。

映像がよぎる。

わたしは独りで生きていくことなんて教えてもらつてないのに！

精一杯叫ぶ自分の姿が、惨めではない。それを見つめているもう一人の自分が遠くにいて

2人の自分は 同じなのに、重ならない。なんだか不思議な夢だった。

もうずっと昔に見たはずの夢が 今も頭の中に焼きついていて、まるで古びた映画フィルムのように ずっと 繰り返されている。

ときどき酷く不安定な感情が浮き上がる。自分ではそれほど自覚しないのだが一度陥ってしまうと抜け出すことは難しい。つまらない考えに沈みこんでしまいやけに悲觀的になって、世界がフィルター越しに濁って見える。

急に一人になったとき。一人であることを思い知らされたとき。自分の孤独に酔ってしまふのかもしれない。

悲劇の中に立つ自分が可哀想で仕方ないのかもしれない。でも、自分がそんなことを考えているなんて想像するだけで、吐き気がするのだ。

とてもとても 自分の体温が冷たくなって、寒く感じるんだ。両腕で力いっぱい自分の体を掻き抱いても全然暖かくならなくて戸惑ってしまう。

弱さなど 悲しみなど 寂しさなど 痛みなど 感じぬ人になってしまえばいいのに。必要の無い感情など捨ててしまえばいいのに。

弱さは、いらぬ。いつも邪魔ばかりする自分の弱さが酷く 疎ましい。強くなりたいんだ。誰にも頼ることなく生きて行けるだけの力がほしい。

そう望むことを否定されるいわれなど、どこにも無いはずだ。

上の階へと抜ける階段の途中、いつもより足が重く感じて、目の奥がズキリと酷く痛んだのだが、何でも無い様に装うことは慣れているからおそらく誰も気が付かないだろう。

それがいいことなのか悪いことなのか、わからないけれど。

階段を上り2階のロビーまで出ると、まるでどこかの演劇堂を思わせるエントランスが奥に広がる。きらびやかとは言わないが、校舎としては幾分豪勢ではじめてみた時は言葉を失ったものだ。通いなれたとは言わないがある程度慣れてきたので違和感を覚えなくなった。

ここがちょうど正面玄関へと続く受け入れ口となっている。

憂鬱さは一向に晴れる兆しを見せないが、一眠りしてしまえば元に戻るだろう。

自分の気分に相反するように爽快に晴れている空が、少しだけ違和感を持って見えた。

暖かく乾いた空気がそばを通り過ぎていく。 もったいないなあ・

・こんなにもいい日なのに。 と思ってしまふ自分はきっと貧乏性だ。

校舎の中から眺めていた景色よりも直に見る芝は鮮やかだ。何度か目を瞬かせることで校舎内の暗さになれていた目を慣らす。

平坦なレンガを敷詰めた正面を抜け、右方に道を折れると寮の屋根が見える。

道に沿って歩を進め、正面から向かって左が女子寮、右が男子寮となっている。

全体的に四角いシルエットの、屋根だけは日本家屋のように三角形となっているのがアクセントといえば、アクセント。

アイボリーの壁に、それを濃くしたような色の屋根で、男子寮と向き合うようにコの字型で建築されている。

7階建てで、所属学科ごとに部屋割りされている。自分的に屋上からの景色はオススメだ。

今の自分にとっては愛しの我が家である。

自室のある3階までをさつさと上って（エレベーターなんて無い。

誰が開発してくれ）通路を一直線に横切ってヘアのドアノブに手をかざす。

毎朝鍵をかけて出かけるので、まずあいているはずが無いのだがどうやら今日は様子が違ったようだ。

ドアの鍵が、はずされている。

いつもとは違った様子に動揺するのは一瞬。するりと背筋をなでるような恐怖が体の中に現れた気がしたが、だからどうだというのだから。できる限り静かに息を殺し、意識をめぐらす。感覚を研ぎ澄ますように。自分を大気の一部に溶け込ませて部屋の中に送り込むかのよう存在を消す。

・・・部屋の中に誰かの気配がある。

そのまま扉に手のひらを押し当ててもう少し相手の存在を探る。どうやら部屋の中の相手は気配を消そうとはしていない様子。それどころかまるで馴染みの場所にでもいるように緊張感をまとっていない。

なんだ・・・そうか。

はぁーと細く息を漏らし、張り巡らした意識を解く。

頭の中に思い浮かんだ人物と似た雰囲気・・・というか存在感を感じる。多分あの人だろう。

躊躇う必要もなくなったところでノブを思いっきりよく回し、幾分にぎやかに扉を開ける。

やっぱり。予想したとおりの光景に気が抜けて、同時に呆れて 腰に軽く手を当て、斜め下からそれを軽く睨むようにして視線を向ける。

視線の先には、どこか冷たい印象を与える短い黒髪の少女が出つ張った窓枠に腰をかけ、片足だけ抱え込むようにしてこちらに目線をよくこしていた。

抱え込んだ足のひざに細い顎を乗せて、瞳にはこちらの反応を期待するような おもしろがるような色を宿している。

先ほどまで眺めていたであろう窓に手をかけたまま、目元だけを緩めた笑みでもって迎え入れられる。

「遅かったなあ、サリジエ。待ち疲れてしまいそうだったよ」

「・・・それはごめんねえ。ところで何で部屋の中にいるのか、というところから突っ込んでいいのかな」

胡散な目を向けて返す。彼女といるとどうしても自分のポジションが「つつこみ」になってしまう。自分が常識人だと思い知らされるというか・・・これは、はたしていいことなのか。

出かける前に鍵代わりにかけたはずの術式は見事に取り外されていたのだ。

誰がやったか、なんてこの状況から予測できないわけが無いのだが、

あえて問わずにいられるほどの度量は残念ながら持ち合わせていない。

「なかなか骨が折れたよ。たかだか部屋の鍵ぐらいで高位呪術をかけているとはさすがに想像できなかった」

まるで何かの目標でも達成できたかのように爽やかな口ぶりだが、やっていることは単なる不法侵入だろ、とやわらかい表現で伝えると彼女は艶めいた笑みを浮かべる。

「それでこそ、やりがいがあるというものさ」

ああ、ほんとにこの人は。

なんだか唐突に、空を仰いでうなだれたい気分になった。

o n e d a y 9 | サブ話（前書き）

本文修正中。

o n e d a y 9 | サブ話

「彼女」のことは知っていた。あくまでも、知識として。

そこら辺の本棚から、魔術関連の偉人とか歴史の教科書を引き出せば、見つけられる名前だからだ。

深遠の奇術師だとか刻弦の調律者なんていう大層仰々しい名称をつけられているものだから、いち学生として一般教養として当然知っては、いた。同じ学校に在籍する上級生だということも知っていた。え、そんな有名人でしかも教科書に載ってる人が同じ学校？それって「実は同級生はナポレオンです」とかっていうレベルじゃね？とか頭の悪いことを思ったりもした。

ありえないな。すごいな。違う世界の人ってやつ。

そういう漠然としたイメージだけ。なのに。

遠い遠い有名人は、おそらく歴史上の人物として語り継がれるだろうその人は、私の部屋に不法侵入し、私に長々と持論を語りかけるんだ。

魔術は、確かに奇怪かもしれない。使えない人々からすればまさしくそれは異常な現象に他ならないだろう。しかしね、僕はそれを使うことが出来る。知ることが出来て実際の存在として認識できているはずなんだ。ここまではいいかい？

ああ、はい。そうですね、確かに。

熱弁をふるう上級生の男子生徒に多少気押されながらも素直に頷いた。

するとさらに弁に熱が入った様子でこぶしをぎゅっと握り、空中でリズムカルに上下させながら弾んだ声で言葉を続ける。

それでもね。彼女の術式というのは実に、本当に不思議だ。

いや、言葉で言い表すことが何より求められるだろう？魔術は。何しろ術式が必要なんだから。うん。彼女も詠唱式がメインだからね。

こんな風に、といって空中に風を意味する図形を描いて見せてくれる。すらすらと指で綴られたそれは薄い緑に発光しながら淡く線を残して空気に溶け込んでいった。

漂いしもの。かの者よ。色を持たずにわが前へ 廻れ シルフィード！・・・ほら、こんな風にね。

男子生徒が発した言葉に続いて、開かれた窓から吹き込んできた風があたしと、取り囲むようにして解説してくれている先輩方の周りをフワリと吹き抜ける。

人によって異なる詠唱式で魔術は表されるため、何気ない言葉にもセンス如何が問われたりするのだ。どうでもいいが、先輩かつこいいんすけど。

ただのガリメガネとか思ってたてごめんなさい。

風の残した軌道を何の気なしに目で追っていると、ちょうど隣に立っていた女子生徒がそうなのよ・・・と前振りを入れて話し出す。

でも！彼女は違うのよ。大体属性なんて制限があるでしょう。さっきの風なんて代表的な例ね。火や水、地 それに闇や光があるわよね。応用としては大気や氷、樹なんかが使いやすくて勝手がいいから用いられることが多いわよね。

そう言ってから女生徒は急に瞳を輝かせる。

「でもね・・・彼女が得意とするのは時魔法なの！

あのミステリアスな華やかさといったら、今も目に焼きついているわ・・・」とかなんとか、うつとりと語っている。

オイオイ戻ってきてくださいヨー。心の中で呟くが効果なし。

時魔法。主立った4大属性のどれにも属さない特殊な魔術式である。人を生き返らせる唯一の奇跡、なんて言われることがあるほど強力なものと言うのが国民共通の見解だ。実際のところ、そんな現象が

起こせるといった記録はどの文献を探しても見当たらないのだが、それというのも使える人自体が極端に少ないために誇張が行き交ったとしても真実を知る術が無く、正しようもない。

それに加え現在実在している時魔法使いはどいつもこいつも秘密主義で一切知識を開くことは無いというのだから、救いようも無い。現在確認されている術者は国内に7人。魔術師が国内に2、3万人だとすればものすごい低率でしか認められていないということは周知の事実。

そして『現在』進行形で人の部屋に居座っている彼女こそ、世にも奇妙な時魔法を操る7分の1・・・

常識はずれ代表・不敵な笑みが似合う人ランキング第一位（勝手に）

ディルキア・シェニ 5 学年所属 学園内で最も将来を有望視される、といっても過言ではない

通称 刻弦の調律者様である。

o n e d a y メイン

(前書き)

小説全文書き直し中です。
9話本文は未修正。

o n e
d a y
メイン

つまり理由が必要で、それに意味がともなっていないと嫌なわけだ。

「おや？・・・。ねえ、そんなところに立ってないで部屋に入ったら」

眉を軽く上げ、なにか珍しいものでも見た　とばかりに感嘆詞をつぶやいたかと思えば、人の部屋をまるで自分の領域だといわんばかりの態度とさりげなさでもって入れ、という。

彼女が妙なことを言い、理解できない言動をとるのはもう今更といつていいほど当たり前に見えるのだが、それでもスルーできるだけの器量は残念なことに持ち合わせていない。というか、彼女の突拍子の無さにバツチり付き合える人間がいるとしたらそんなもの、国宝指定だろう。

つらつらと結論の無いようなことを考えながらも、しらけた表情のため息だけはしつかり返す。もう、なんか・・・いいわ。とか呟いてから、部屋の右隅に備えた背の低い本棚へと足を向ける。今日中に課題を仕上げてしまいたいのだ。びっしりと教科書の詰まった本棚が手招きしているように見えるのは、気のせいかな。

まあとにかく　構うの、

面倒だ。

正直、理由など思いつかない。非常に不思議だが考えてもきつとわからないだろうと割り切っているからそもそも今更だと思うのだ。彼女はやたらとあたしに構いたがる。初対面のときの態度から考え

れば奇跡だ、といえるぐらいに何かと折を見ては いや折りなど見なくても接触の機会をわざわざ作り出しては構ってくる位だ。

しかし、言い切れる。あたしはそんなきっかけを作ってはいない。なぜなら、彼女は3学年上の生徒であり要するに先輩なのだ。あたしが知る世間一般の常識と違わず年上を敬う、とか 権力者には媚びるといった常識があるこの世界では、それこそ部活だとか家族ぐるみの昔なじみ、なんていう位置関係が無ければ仲良しになる機会には恵まれない。

以上の理由から、普通に考えてきつかけなど理由などもてるはずが無い。と、あたしは思っている。

・・・などといってみても実際彼女はこんなところにいるのが真実なのだが。

とりあえず、術式関連の本を掴みとつてからすぐそばにある寝転びクッション（別名ごろりんクッション）に日曜日のお父さんのようなポーズで寝転びページをめくる。

ぼふりとクッションに顔を埋めて 頭を勉強に切り替える。

どんな状況でもスイッチ一つで切り替わるこの頭だけは、自分の中で誇れるところだ。

どうやら今は、上手く会話ができない予感。取り繕うことが出来ない状況は望ましくなくて不合理であると自覚しているのに、無条件に人が煩わしいく感じてしまう。こういう感情は本当にどうしようもなくやっかいだ。

・まあ、ともかく誰がいようが集中してしまえば問題なし。周囲の環境を100%シャットダウンして本の世界に入り込めば、そこには自分だけしかいなくなるのだから。

そんな行動をどう思ったのかはわからないが、対面する窓際からじつと視線が送られてくるのを肌で感じる。

ぺらり、ぺらり　と薄い紙をめくる音だけが静かな部屋に響く。

じーーーーー

はい無視。無視。

ぺらり　パラパラパラ。ここ前に見た。あーここ今日の授業で出たところだ。　・・・ふうん。なるほどねー。そういう裏話があったのか。

じーーーーー

完全無視。

・・・そういえば図書室から借りた本どこやったっけ。課題まとめなきゃなあ。

ジーーーーー

しつこい。なんか熱視線なんですけど。

・・・というから学年の魔術系は今日が試験日だと掲示板に書いてあったような。

どうなっているんだか。一息はいて、しゅしゅ顔を本から持ち上げてシェニを見やる。

「・・・あのさ。今日試験日じゃないの？」

熱視線を振り払うように顔をあげると、彼女が吃驚するぐらいに無表情でこちらを見つめていたことに気づき、その視線から身を引いてしまった。

しかしその表情をあたしが捉えることができたのはほんの一瞬で、幻でした。とても言うかのようにいつもの軽薄な印象の表情を作り上げてしまう。

瞳の奥を覗き込むように彼女の目に焦点を合わせる。薄い灰褐色を宿す、鉱石みたいな瞳だ。

彼女は艶やかな笑みを形作る。実際、綺麗な顔をしていると思う。比較対象が男性で申し訳ないが、オーファスとは部類が違う印象的な美人といった感じの顔つきをしている。

個性的な顔立ちといったわけではないのに記憶に残る。ああ美人だよねあの人でしょ。と1度見たら覚えてしまえるような不思議な魅力を持っているのだ。

それはいい。いいのだが・・・どうしたものだろう。

困惑しながらも、じっと目を合わせているとシェニは途端にくしゃりと顔を崩して人懐っこい笑みを見せる。

「やっと目を合わせてくれたね。そうも邪険にされるとさすがに居づらいものがある」

「ごめん……。って言うておくべき？」

「それは私に聞くべきことではないけれどね。君と話をするのは楽しくて。やっと抜け出てきたのに、さも空気のような扱いをされてはさすがに寂しくなってくるよ。」

シエニはすどん、と両足を枠から下ろして窓の出っ張り部分に軽く腰をかけるように体勢を直した。その姿がやたらとスマートといふかなんというか。どうして自分の周りにはこうも絵になる人ばかりなのか・もういつそ絵画を友達にしてみえばいいんじゃない？あたし。なんだか悲しくなってくる。

殊勝なことを言いながらも、その表情は考えの読めないうつすらとした笑みを描いているのだから本心はまったくの謎である。

この言葉だとか態度からわかることだが、彼女は自分の特殊さを誇ったりそれに驕ることが無い。つかみどころの無い、本っ当に！掴めない、凹凸のない表面つるつるグリセリン状態の性格ではあるが、高飛車とか傲慢とかそういった行き過ぎた自信とは無縁のひとに思える。

どんなに表面を上手いこと取り繕っても隙間から覗く傲慢さは嫌に目に付くものでそういった人間はなんとなく、わかるのだ。

しかし彼女はそういった部類の人間ではないらしい。

まあ、そういうところは割りと好ましく思っているのだが・あえて告げるつもりも無い。

彼女の存在だってイレギュラーなのだ。理想の世界で理想の自分が作り出すのはあくまでもあたしの意に則した世界であるべきなのだから突発事象は嬉しくないことのはず。

それでも胸が軽くなるような空が明るく見えるような「喜び」がこの体を包むのはなぜなんだろうか。あたしが望むのはただ楽しくご都合主義なファンタジーサクセスストーリーで、実際の人とのかわりなんてものはどうだっていい。

きつとリアルが無い世界で、なによりのリアルを求めているあたし
が何よりも矛盾しているんだろう。

o n e d a y 1 0

こうであるべきだ、と決め付けられる。こうであって欲しいと言う期待すらただの見栄だと気がついた。

何を見ているの。どこを見ているの。ずっと傍に居たのに、なぜわからないの。

あなたにとって私の苦しみなどどうでもいいことなの？それを選べばきっと私は苦痛に嘆く。

私の頭を占めるのは幼い私を、冷たい沈黙から拾い上げたあなたと過ごした日々。きっと一生捨てられない記憶。

だからこそなのか、わからないけれど。この日々の先に待つのが私を殺すであろう痛みのみだとしても

それでもあなたの期待に応えたいと、私は愚かしく高みに手を伸ばす。

あーでもないこーでもないと彼女が語る学説をうん・うん・とあたしが聞き流し、時にはどう考えてもこれあたしに聞くべきことじゃないのでは？と思うようなことでも真剣な顔で説きはじめる。悪気のなさそうな様子なものだから更に始末が悪い。

知らん。わからん。を通せば何が楽しいのかにまりと笑みを浮かべてこちらに質問のアローをかましてくる。だから身を乗り出すな。

よって来るな！といえば素直に従うのだが、考えの読めない相手は本当に扱いにくい、と彼女には思い知らされるのだ。

「だーかーらー魔法は広義で言えば魔術の一種何じゃないの。いいんじゃないのそれで。というかあたしはまだ2学年ですよー？お忘れかもしれないけど実技授業自体が少ないの。わからなくても仕方が無くないですか。5学年になったらまた考えるよ。うん・・・そうだね。はいはい。・・・」

シェニが部屋に来てから1時間半。ずっと一方的な語りを聞かされ耳だこ状態である。正直嫌気が差している。

目線はレポート用紙に釘付けのまま。しかしあまりの雑音に集中しきれず手元が幾分疎かで、空白の目立つ用紙がどこか寒々しい。

机に向かっていた所為で血液が脳に大集合しているためか、鈍く響くような頭痛がする。

グリグリとこめかみを押さえつけて誤魔化し、うつ伏せの体勢からよつこらしよ、と起き上がると1時間前と変わらぬ姿勢で窓辺に寄り添うシェニがいる。辛くないのだろうかと多少気になるのも仕方が無いことだ。

「しかしね、本当にそうだろうか。君の言い方からすると狭義では別の意味を持つ、と捉えているのだろうか？教科書的な内容になってしまいうが、『魔法とは個人の才能如何で判断すべき事象ではない。この世界上に存在する生体の全てが持ちうる可能性として考えることが最も適切であろう。力の原動力が人の生体能力、強いては生まれ持った容量、核であるとされる魔術とは本質的に異なるものだ、と私はここに定義する』とかの高名なミシエル・ポートマンも述べ

ている。確立されている実論が不足していることは確かだがそれでも私が考えるに・・・」

なんたらこうたら・・・まだまだ続いている。彼女の語りは止まらない。

まさに、エンドレス。・・・息継ぎは？句読点は？どこかに家出してしまったのだろうか。戻ってきておくれよ！と脳内でバーチャル人情劇が繰り広げられている。

はい、バカみたいだからやめようね！。

ああこれうるさいわ、と思う。残念なことに、興味の無い分野の話題でもある。

というか、多分ああうるさいなあ　と自分の口から音を発したような気がする。

第一。誰だ、ミシエルって。ああミシエルデショ！なんて言えない。

呆れを集約したようなため息を吐き出したところでそれを気に留めることなく彼女はうんうんとなにやら考え込んでいる。

それを視界に納めたまま、ぐるりと肩を回す。どうにも疲れることばかりだ。

学科授業が主である初級学年、つまり1、2学年は大雑把な言い方をすれば基礎科目の基礎！という内容ばかりを学ぶのである。誰々さんが述べた何とかという学説がどうこうで・・・・・・なんて

言い出すのはせいぜい中級学年以上の生徒なのだ。

それこそ2年生がすらすらと語りだしたら、それはそれでかなり怖いものがある。

しかしそんな他人の事情には興味が無いのか、それともただ語りたいただけなのか　こうしてあたしを訪ねては学者のごとく語りだすのは珍しくない。

その度に思う。まるで、自分の世界に鍵を掛けているようだなあと。外の状況など気にしなくて済むように。研究者のように、深く狭い自分だけの部屋が心の中にあってそこに閉じこもっている。

とは言ってもそれをどうするつもりも自分には無い。自分は彼女のように一つの物事にのめり込むタイプではないが、周囲を気にせず好き勝手やるタイプの気はあるような気がする。その身勝手さは多分共通している。

幾分大きめな声で呼びかければどこかうつろだった瞳に光が戻る。すっきりしないような表情だが、まだこちらに意識を向けてくれるだけまじだろう。

「シェニ。　毎回思うのだけど。そんな小難しい話あたしに振っても望むような答えは返せないよ？ほら・それこそ、いっつも君の周りに居る人たちに聞かせてやればいいんじゃない？多分バックに

花飛ばす勢いで乗ってくれると思うけど。」

すると、どこか困ったような苦笑を返される。

「・・・それはさすがに、ね。私にも好みというものがある。理を解さぬ、興味や損得ばかりで近寄る動物は嫌いなんだ。」

動物って。もはやすでに人間じゃない認識ですか。

「贅沢だねえ・・・上級家庭の子息や息女と関係作っておいて損は無と思うけど。」

お家柄、というものがある。お金持ち、権力者、人脈がある、能力が優れている。そういったものを基準に人間を格付けしてしまうらしい。

人権尊重や男女平等、そんなものが当たり前だと思っていた。自分の中にある常識や価値観がそのまま通用するこの世界でそれが覆されるなんて思いもなかった。根拠なんてまったく無いけれど何故か、それが絶対だと思い込んでさえいた。

シエニはどこか含みのある笑みを口元に浮かべている。

「サリジエの打算的な物言いはどうしてか、好ましく思えるのだけだね。」

1から10まで計算、打算で近寄る人間ほど信用できないものはな

いさ。いずれ駒として良いように利用されるのが目に見えている。
・ 嘆かわしいことだ」

どこか演技がかった物言いだが、まあわからなくは無い。実体験に基づくのであろうその言葉にあいまいな笑みを返した。

才能のある、実力のある彼女と友好を結べば自分たちに有利なことがあるのではないか。そういう類の打算。そこらへんを見ればゴロゴロ転がっている・・・とは大げさかもしれないが、決して遠い世界の話ではない。振り返れば、目を凝らせば案外すぐ傍にあるものだ。

そついったものを嫌悪する。自分を道具のように利用しようとたくらむ人々を疎ましく思う。

当然だと思う。でもそれと同じ位、仕方ないことなんじゃないか、と達観に近い諦めを抱いている自分が居る。

自分だって、有利になるもの不利になるものを選んでいる。自分に不利なものは近づけずまた近寄ろうとしないし、有利なものは傍に置き必要になれば使おうとするだろう。何をいまさら、そんな理由で他人を疎むことが出来るだろうか。

自分はそんな汚いことはしないと他人を蔑むことが出来るだろうか。

・・・わからない。けれど自分が同じ立場にあればきっと不快なそれを遠ざけようとするだろうな、と予測できる。

突然、パチリとひらめくものがある。決して揺るぐことの無いバイオレットの瞳。

彼ならどういだろうか。何かと接点の多い、おそらく親友とでも呼ぶのが自分たちの関係を表すのに最もふさわしだろう彼ならば。そんな思いがふと頭をよぎる。

きっとこんな中途半端なことは言わないのだろう。ばっさり切って捨てるか、自分はこうだと迷いの無い言葉で話を終わらせることも彼なら出来るのだろうか？

その強さが羨ましいとずっと思っていた。自分が持ち得ない強さを持つ彼がやたらと眩しくて、嫉妬のような暗い感情を抱くこともあった。それでも、だからこそ傍にいたいと、意識せずに共にいることを望んでいたのかもしれない。

思考の海に沈みながらも、この場にいない人を想うなんてまるで恋でもしているみたいだな、と可笑しくなる。

思わず緩んだあたしの表情を偶然見たらしいシェニが、まるであたしが何を考えていたのか知っているかの様に柔らかく微笑んだ。

o n e d a y 1 1

いずれ手が届くのだろうかとただ見上げていた

大きな手 大きな背中 自分を守る声は いつも傍にあつて

子供のままでいたいような気もする。大人になってこの人の視点に立ってみたいとも思う。

過ぎてゆく日々が積み重なって いつしか決して止まらぬ時間に怯えるようになった。

何も変わらぬ自分が齒痒くなにより疎ましく感じた。

時々立ち止まり周囲を見渡してみる。ああいつの間にかこんな所に来ていたのか

変わってしまった景色に妙な郷愁を抱き、暫し呆然と立ち尽くす

思い知らされるのは後悔か寂しさか ジリつく胸がやけに

痛んでしうがなかった。

ごろりと寝返りをうつて意味も無くぼんやりと過ごす。何もしない時間をつくるということ。意識してのことではないが、こうやって一人の時間を楽しむことが出来る自分は割と孤独が好きらしい。

語り部が帰った部屋はいつもの静寂を取り戻している。

わずかに開いた窓から吹き込む風が爽やかで眠りの世界の招待されてしまいそう・・・なんてファンシーな事を考えてみる。乙女かよ、

なんて声に返るものも無い。

目を閉じればそこに広がるのは真っ暗闇だ。安心する。落ち着く。あの人が傍にいたような気がするから・・・なんてフラグさえ立て放題。

ああ、眠い。

重くなる目蓋をたいした抵抗も無くおろす。じわりじわりと暖かい闇に落ちる。

それはきつと夢だった。

幼い少女が呆然と立ち尽くしている。周囲には人影も無く耳が痛くなる静寂が腰を下ろしている。彼女は自分のおかれた状況が理解できないでいるらしい。暗いじめじめとした見知らぬ景色と異様な空気がどうにも信じられなくて、思考がまとまらないのだ。

暗さに慣れてきた目に映るのは、どう見ても人工的ではない場所。

ごつごつとした岩で覆われた四方はよくよく見なくとも自室の暖かい壁の色とはかけ離れていて、それ自体が壁なのだと認識するまでがやけに長かった。

幼子だって動かなければ変わらない状況ぐらいは判断できるのだ。ぐずらずに歩む迷いない足取りは年に似合わずといえるほどしっかりしている。

歩いて歩いても出口が見えない。自分がひとりだという状況が不安を煽った。思わず止まりそうになる足を力任せに前に進める様子がいかにもその子の感情を表しているようで、不安げに下げられた目じりが10に満たない年であるうことを想像させる。

大丈夫？怖かったね、とたいていの常識ある大人ならば声を掛けるべきなのに、その事を思いつかない。「わたし」は小さな子供が不安げに歩む、その姿をぼんやりと眺めている。

だからこれは夢だろうと思った。不思議な展開も思い通りの行動が取れないのも、夢の中だから。

どのくらい時間が経っただろうか。硬い地面を踏みしめ歩く少女の足に薄く血が滲み、変わらぬ景色に不安を映す表情も抜け落ちてきたところ。

少女が俯けていた顔をゆつくりと持ち上げる。何か、そこにあったような気がしたのだ。

暗い洞窟の先に光が見える。それは久しく感じる日の光によく似て

いた。

外に出られる、と気を急かしたのか少女は思わず駆け出そうとしてやめた。

違う、あれは太陽の光じゃない。

スラリと伸びた長身。闇に溶ける黒。

浮かび上がる意識。最後に見えたのは、

「うえええええつ!!?」

急激に意識が戻ってくる。はずみをつけて起こした上半身がぱきりと嫌な音を立てる。

「あ・・・?うわあ・・・」

落ち着け。夢だ、夢。ああそれにしても、

もしかもしかと髪をかき混ぜて不快なそれを振り払いおとす。

「もー・・・ないわ・・・」

ぼそりと呟いてそれが現実である事に安心する。

ありえない。ありえな過ぎて目が覚めた今でさえうつすらと寒い空気に縮こまりそうになる。

嫌なもん見た・・・。心底、嫌なものだった。それでいて何か不幸がおきそうな予感さえする夢だ。

じわりと背筋に滲んだ汗は過去の恐怖から来るものなのか、それとも何かの予兆なのか。

ふと見渡せば部屋の中は真っ暗。開け放した窓から入る風もすっかり冷えこんでいる。

変な体勢で寝そべったせい、節々が痛む。ぴき、と音を立てる関節をほぐすように立ち上がり大きく伸びをする。どのくらい眠ったのか、考えるのが恐ろしい。

窓を閉めるために窓辺によれば空には満点のお星様。ぼけーとそれを眺めて、ふと下を除けばナイスなタイミングで見知った顔が目に入る。

こんな偶然も、あるんだなあ。

なんとなく目を離さないでいると彼はあっという間にスタスタ歩き去ってしまう。

この下を通ったという事はどこかへお出かけだろうか。

・・・あ、そうだ。

いい事思いついたー。わーい。（テンションが低いのは仕様です）

嫌な事は早急に忘れるのが吉である。

思い立ったが吉日とも言っじゃないか。言い訳がましい言葉がぴったりのこの気分。

どうにかすつきりさせよう。

手早く窓の鍵を閉めて部屋の隅に置かれた椅子から上着を取る。

妙に急く気分をそのまま足に乗せて、部屋を出た。

寮の玄関までの階段を下りれば消灯時間が過ぎてしまったのだろう、薄明かりのみで視界が頼りない事この上ない。という事は、少なくとも見積もっても5時間は夢の中へ小旅行していた・・・という事になる。完全にダメ人間体質。

ドアに手を掛けると、がちゃり、と抵抗があり扉は開かず。しっかりと鍵がかかっているわけだ。でもこれぐらいどうってことないわ

けで。

ぱちり、とドアノブを指先で弾けば硬質な音が開錠を告げる。本当に、便利な事だ。

外は寒い。月明かりが照らしているおかげで室内よりは幾分明るく、目も利く。

学院の四方を囲む真っ暗な森が見えた。

子供のころはこの暗闇が何よりも怖かったのに、いつからか夜が好きになっていた。

自分の手さえ見えない不透明さがどうしてか、心地よかったのだ。

彼を始めて見たときのことはよく覚えている。

それこそ昨日のことのように鮮明で、場面に音までつけて再生することだって可能だ。

ある国で5年に一度だけ開かれる大きな武術大会。いかにもファンタジーなそれが興味を引いてうきうきしながら城門をくぐった。

屈強そうなオニイサンや近寄ってはいけないと警告が聞こえてきそうな魔女のお姉さん。

これぞ異国！な風情を纏った人から旅人？ご飯食べてる？と思わずやさしく話しかけてしまいそうな人まで様々。

少なくとも、どの人も「見識豊かそうな」、言ってしまうえば大人ばかりだった。

そんな中で彼は光っていたのだ。それは思わず目を奪われる清廉さで剛健さで美しさだった。

自分の背の丈をゆうに超える大人たちの中であつても見劣りしない、独特の雰囲気にも目で全てを搔っ攫われた気がした。

160cmあるかないかの小柄な少年だ。くたびれた衣服を纏い、防具のひとつも着けず、ただ一振りの曲剣をベルトに引っ掛けているだけ。路上にでも居そうな出で立ちなのに、決してそんな場所には似つかわしくない瞳を持っているのが印象的だった。

まっすぐ前だけを見つめるバイオレット。あの目に映るものはどんな景色なんだろう。

ちょっと可笑しいぐらいに見つめ続けていたあたしを、彼が警戒心全開で睨みつけるまでの30秒弱。

あたしはきつとあの瞬間、初めてこの世界を現実と認めることが出来たのだ。

o n e d a y 1 2

目を閉じて、願う。

そんな事で叶うほど陳腐な願いならとつくの昔に捨てた。

体を丸め、嗚咽をこらえて泣き腫らした目を開く。

そうでもしなきゃ見逃してしまいそうなちっばけな願いを、自分は追いつけている。

暗闇に溶ける濃紺の後姿に向かって「力」を放った。

心臓から、大動脈。鎖骨を上って上腕へ。前腕、指先、徐々に熱をめぐらす感覚が自分の内に血液や酸素じゃない「何か」が息づいている事を伝えてくる。まっすぐ前へと伸ばした両腕の先、手掌からぶわりと立ち上がる青い光をいくつかに分散させ、前に撃つ。

「隠者の水葬 ウンディーネ」

呟けば目にも留まらぬ速さで標的に向かって寸法だ。

空を切り違わず標的を捉えるはずのそれは、背中から身を落とし横に転がる華麗な身のこなしで全て避けられてしまふ。くるりと軽やかに体勢を整えこちらに顔を向けた「彼」から伝わる濃厚な殺氣に思わず身が震える。

陽炎のようにゆれる魔力が彼から立ち上るのを捉えながら右手を口

元に寄せる。硬質な赤い石がはめ込まれた指輪から鈍く光が漏れてあたしを包むのと同時に彼の放つ術が目前に迫り、ジュワーとかブシュアなんて溶解音が立ち上る。

腕を一振りして防御膜を取り払えば、開けた視界に呆れたような、諦めたような表情で立ち尽くす彼が見えた。

「こんばんわ、キリ」

笑みを形作った顔を向けると「なんて物騒な挨拶だよ。お前はアサシンか」と言つてキリは苦笑して見せた。

こんな夜中に外へ出かけようという彼を問い詰めると「眠れないから、息抜き」と大して面白みの無い答えが返ってきた。ふうん。あたしは寝すぎて目が冴えたよ　と言おうとしてさすがにそれは不謹慎かな、と口をつぐんだ。

「だから暇だったんだって」
そっちこそなんでこんな時間に攻撃仕掛けてくるんだ、と聞いてきた彼に答える。

「お前は暇になると人に向けて攻撃呪文を唱えるのか」
さも吃驚した、と言う風に目を見開いて見せている。

「や、それはキリだから。」

理由になつてないし・・・といつてうなだれる彼にむけてふふん、と笑つてみせる。

「君がそこにいる、それが理由だ」

「もう誰かこのガキに常識を叩き込んでやつてくれ・・・」

「常識、かぁ」

ついさっきまでの悶々とした思考が思い返される。常識。それを言うなら自分こそが非常識なんじゃないかなんて今更な考え。

キリはどこことなく真剣さを混ぜて低い声で気遣うように言う。

「どうした？・・・なんか様子変だけど」

敏い。だが真つ直ぐな気遣いがやはり年相応な幼さを見せている。

「変にもなるわ！・・・ってね」

夜に満ちる清涼な冷たい湿気を含む空気をいっぱいに吸い込む。うん、と手を伸ばして、釣られる様に上げた視界には星が瞬いている。どうしても届く事がないそれを握り締めるように強くこぶしを閉じた。

進む道が閉ざされたように闇に覆われていて、はつきりと色ずくのは隣を歩くこの少年だけじゃないか、なんて思う。切れ長の瞳もバイオレットの色彩も、それを更にトーンダウンしたような濃紺の髪も「昔」のあたしの周りには存在し得なかった色で

黒やら茶色やら頑張って染めたか抜いたかした金色だとかうつとおいしいぐらいに飾り立てようとする人全てが面倒で仕方が無かった。

黙り込んだあたしを気にするような空気を出しながらも視線は真っ直ぐ前を見つめている。

やっぱり、あたしは彼が羨ましい。揺ぎ無さだとか真っ直ぐな一途さが幼さ故のものだとしても自分はこんなもの、一度だって持てなかった。

進めていた歩みを止めて、彼を見つめる。吐き出す息が白く滲んだ。

「あのね。こうやってここに居れるだけで多分幸せなんだけど」

彼も同じように歩みを止め、特に感情を示さない表情のまま言葉の続きを待っている。

「自分の力で得たものじゃないからだとか卑怯だからとかね、そういうことは思わない。得たチャンスを、逃す気はない。罪悪感も無い。ただ・・・」

たまに怖くなるんだ。真っ直ぐに前だけを見つめるひと、何かとても重い荷物を背負っているのに絶対に膝をつかない人、揺るがない

強さを一身に求める人、見えない未来に悩んでも決して逃げない人。そんなすごい人が沢山いるってことをこの世界で初めて知ったんだよ。

でもそれは違うなってこともわかっている。

「怖い」って言ったら彼が失望するんじゃないか、ってそんなことくだらない。ばかばかしい。と言って切り捨ててしまえない。それはじぶんの圧倒的な弱さだ。

「人が、きらいだ。思い通りにいかないもの。」

ああそもそもなんでこんな脈絡のない事を話しているのか。

こんなこと他人に言ったところでどうなると言うの。

なんてね、とか青少年の悩みーとか適当に誤魔化して笑おうとした。キリの表情を見るまでは。思わず、固まる。思考も動作も。

「なんで笑うの」

声は洩らさずに目じりを下げて口角を緩めて柔らかくキリが笑んでいる。

「笑うとこじゃないんだけど」

「サリジエでもそういう風に考えて、止まるんだな」
笑みを納めて、でもまだ柔らかい表情で言葉を紡ぐ。

「俺より年下なんだっとな、そういえば。部分部分では思い出すけど改めて考えた事なかったかも」

「年がどうかそんな話してないよ。ふざけてんの？」

「ふざけてない。」

不機嫌さが滲んでしまった声に一言、断ち切るように返されて怯みそうになる。

それでも視線は逸らさないように目に力をこめて強く彼を見返す。

「人が嫌いなら、俺が傍にいる。人が怖いなら、俺が盾になる。ただ隣にいただけが友達じゃないだろ？それと、サリジエはサリジエだ。自分で得ていないものなんて無い。ここにいる事もこうやって話してる事も選んだのはお前だろ？」

キリが手を伸ばして、くしゃりとあたしの頭を撫ぜる。

「なあサリ。俺はお前が強いと思うし、一緒にいると楽しいよ。だからこうやって話せる。」

おどけた様に両腕を広げてみせる。「お前というの好きだけど・・・」
と言ってにこりと笑った。

止めていた歩みを進め、前に行く彼の背中を見ながらポカリと口を開く。そこから感嘆の息まで洩れた。

（なんとまあ。恥ずかしい事を。プロポーズかと。）
呆気にとられて、彼の言葉を咀嚼し直して、ゆっくり息を吐き出す。

彼の言う事は正しい。友人を慰める言葉としては100点満点だと思
う。
でもね。

だんだん遠くなる背中を見送っているとふいにキリが立ち止まって
手招きする。それにゆるく笑みを向けてあたしは彼の隣へと向かつ
た。

でもね、違うんだ。私は一人で立てるようになりたい。誰かに縋る

事でしか立てないような見っとも無い人間でありたくは無いの。

あなたの優しさに甘えて、縋っている。こんなあたしも、いつかは消し去ろう。

o n e d a y 1 2 (後書き)

全話修正中です。

b e f o r 1

どうしたって目が向いて見つけてしまふ。これは恋かしら・・・なんて。

まさに頭がお花畑な状態・・・いやいや馬鹿なこと考えてる場合じゃないのだ。ここに集う皆さんの視線を一身に受けるその白い四角目線のその先には、一枚の広告がある。

「後期昇級試験 試験内容について」

ほらまた面倒事がやってきた。

P 1 0 2 | ?

試験。 考査。 学生の皆さんにはおなじみの定期行事の一つだろうこのイベントはどうしたって避けられないものである。それは異次元だろうがファンタジーだろうが「学校」と名のつく機関に身を置いていればこなさないわけにはいけない試験なわけだ。（若干大げさな気がするけども）

妙に達筆な字で書きつづられた試験内容に目が釘づけになのはただ試験が嫌だというそればかりじゃない。

1学年から7学年までの全試験内容が一斉に掲示板へと張り出されるこの日はエントランスも大盛況なわけだがどこからもふーんとかああ早めに探さなきゃなとか、とか明らかにこなれた声が聞こえてくる。いやいやおかしいからこれ。

試験形式について

ウェリク2月3の日に当該学年に関して実技試験の行う。なおこれに関しては4人組のグループで参加すること。グループ編成は生徒任意とする。

当該学年・・・2,3,4学年

試験地・・・紫煙の峠、深鏡の洞窟、ファンタンの平原、マイゼルの森 から選択

試験内容はグループ編成を試験担当官に申請後、能力値・所属科等を考慮し発表する。

グループ試験ってなに。試験内容はみんな違うってか。え、そもそも

もこれすごい生徒にお任せなんですけどもこれでいいのか。

試験として成り立つのか不明なそれをじっと見つめていると妙に不安になってくる。

常識が通じないって言っても本当にこれは試験何だろうか。分からない。というか、不安すぎる。

とにもかくにも早めに動かないと間に合わないなあと独りごちてから、この問題を解決する糸口へと一歩足を踏み出した。

何事も情報から始まるのだ。知らないことは出来ないし、あいまいな知識はいつだって味方になるとは限らない。わからないなら先人に聞け、だ。

「コーンにーちわー」

だだっぴろい教室に向けて声を上げた下級生に、幾人かの生徒が何だ、というように顔を向ける。

顔こそちらには向けていないが、その中に見知った人物を見つけ、サリジエはそちらに歩み寄る。

するとその人物は足音に気がついたのか、はたまた野生の感かふと顔をあげた後少し首をかしげ、にやりと口角をあげてその顔に笑みを乗せる。

「やあ来たね」

「・・・予測済みって感じが癪に障りますねー」

三日月みたいに目じりを下げて笑う顔は人なつつくくて優しげに見えるけども、目が楽しげに光っている。きっと自分の思う通りになったことに満足しているだけだろう。この策略家め。

「聞きたいことは試験の正当性と評価基準について、グループを組む際の基準や今までの傾向について。さあ、あとは？」

「どうして先輩がそんなに人の上に立つことが大好きなのかについて、ですかね」

教えてやろうかふんってな顔した上級生は、顔の横にぴんと立た人差し指をこちらの顔に向けてまた笑った。

「自分が優位にいるって状況は、それが気に入らないやつであるほど面白いよね」

その言葉に顔を引きつらせることだって予測済みなんだろうが。絶対いつかその横つつらに一発火炎式叩き込んでやる。

気合いでにつこり笑えば、そいつは耐えきれないという風に吹きだした。

普段はにやにやした顔に（にこにこではない。私にはそう見えない）穏やかな話し方も相まってとっつきやすい人物に見えるこの上級生

だが、今現在椅子の背もたれにふんぞり返って足まで組んで偉そうにしていらつしやる様子からわかるように、とてもじゃないが穏やかな先輩とは言えない。

というかエス。度を越えたエスと呼んでドSというやつだ。忘れもしない、はじめて話しかけられ第一声が「ねえ年齢相応っていう言葉知ってる？実力云々いつでも目ざわりな感じだよね君」だからね。

ああ変な人につかまっちゃったでしょう。って思ったのはいつだったか。

かわりたくねー。面倒なタイプだよ絶対。という第一印象は外れておらず、まあ5学年にしてすでに国の従文官に内定しているというその頭脳だけはすごいのだろうけれど。それにしても天才には変人が・・・というのを地で行く人なのだ。

「というかオブ先輩に用はないですから。シン先輩に会いに来たんですって。はいそこどけて」

「・・・シンに？」

いぶかしげな声で笑みを収めて椅子に座ったまま振り返るエリック・オブジリット先輩の目線の先にいるその人こそ「会いにきた」先輩である。

つり上がった目に全体的にシャープな造りの顔貌はどうみても周囲に人が寄ってこないタイプだが実際は気風のいい兄貴的なその人が

シン・オーディ先輩だ。

その強面がいかにもいやだな、という風に歪み、こちらを見やる。

「俺に振るな。てかそいつに聞けばいいだろ。俺に聞くより正確だと思っけど」

「いやです。どれだけ正確であろうと気分よく話が聞きたいです。不快になるために上級生の教室まで足運んできたと思いますか」

「いい度胸だねサリジエ。ちょっとその言葉忘れないからね。俺」

「知ってますか？オブ先輩。執念深い男の人って俗にストーカーとかいうこともあるんですよ」

がつりと人の肩を掴んで話に割り込んできたオブ先輩にむけて鼻笑いと共に言い放つと、「ストーカー？・・・」と首を傾げられる。やっぱりこういう言葉は通じないのか。

とりあえず、執念深くて精神的にちょっとあれな感じで性格曲がつた人を指す呼称です。と説明すると微笑みと共に肩に置かれた手にもものすごい力が込められたが、そこは兄貴分シン先輩がいる。

「まあやめとけて・・・話が進まねえから・・・」

オブ先輩の魔手から逃れて背後に隠れた私をさりげなく隠してくれる。ほんとにお兄ちゃんだわシン先輩。

たれ目優男系のオブ先輩とつり目暴走族総長系のシン先輩が仲がいいのは本当に不思議だが、案外いい組み合わせかもしれない。最初に教室に入ったときからこの2人は隣同士で座っていた。だからこそシン先輩までたどり着けなかったのだが。

「実地試験のことたる？そんな難しく考えることじゃねえし、説明するから、まあ座れ。2人とも」

ああ近寄りたくねー視界に入れたくねーとか思いつつもああだこうだ言ってくるオブ先輩の相手をしていると救いの手を入れてくれるシン先輩。

兄貴というよりは・・・母？

大分失礼なことを考えつつも、とりあえずは目先の試験についてだ。そこらへんの椅子を引いて私が勝手に座ると、チツと舌打ち的な音の後にオブ先輩も腰を下ろす。

これからはシン先輩一人の時を狙おう、と心に決めた午後13時。

b e f o r 1 (後書き)

ほんとに進まない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9148d/>

ROAM

2011年10月4日22時10分発行